

ギリシア人とリュディア人

中 井 義 明

目 次

は じ め に

1. リュディアとギリシア人の関係
2. ギリシア人の異民族観
3. リュディア人にとってのギリシア人

お わ り に

は じ め に

小アジアの内陸部、ヘルモス川の上流、トゥモロス山の北麓、パクトロス川のほとりにあるサルディスの町を都とするリュディア王国はその洗練された文化と豊かな富によって多くのギリシア人を魅了すると共に、その強大な軍勢力は国境を接するギリシア諸都市を畏怖させた⁽¹⁾。現代の研究者は小アジアのギリシア人とリュディア王国との関係を一種の妥協の上に成り立ち、互いに満足のいく状態にあったと評価している⁽²⁾。

サッフォーはサルディスの宮廷文化に魅せられて自分の膝元から離れていった教え子を歌にしているし⁽³⁾、アルキロコスがリュディア王の富などは鼻にも掛けていないと嘯いている⁽⁴⁾。この事は逆に彼らギリシア人のリュディアへの関心の高さと魅力の強さを示している。

リュディアに対する関心は決して詩人に限定されるものではない。ソロン

はリュディアの宮廷を訪れ、全盛期の王クロイソスと幸福について議論を交わしているし⁽⁵⁾、同じくアテナイのアルクメオンは王と親交を重ね、莫大な富を手にしたと伝えられている⁽⁶⁾。コリントスの僭主ペリアンドロスはリュディア王に下された神託をミレトスに教え、ミレトスとリュディアとの講和に一役買っているし⁽⁷⁾、スパルタはリュディア王の寄付に感謝して大きな青銅の鼎を返礼として贈ったとされる⁽⁸⁾。これらはいずれも歴史的事実と言うよりは、伝説に属するが、同時代のギリシア人にとってリュディアは単に羨望と憧れの地にとどまらず、経済的にも政治的にもリュディアと関係を持つことが大きな意味を持っていた事をうかがわせる。

しかし、このリュディアの繁栄は突然終焉を迎え、得意の絶頂にあった王は悲劇の真ん中に立たされるのである⁽⁹⁾。このような運命の不確かさ、激変、あまりにも大きい落差は歴史家や詩人、画人の関心を長くひきつける事となった。バビロニアのナボニドスの年代記にはペルシア王のキューロスがリュディアの地に遠征し、その地の王を殺して戦利品を得、占領軍を置いたことを伝えている⁽¹⁰⁾。ヘロドトスは火刑壇に臨んだ王が神によって無残な死から奇跡的に助けられたと伝え⁽¹¹⁾、パッキュリデスは焼身自殺をはかった王が娘たちと共に神の手で救われはるか北のヒュペルボレオスの住む世界に移された事を歌い⁽¹²⁾、ルーブルにあるミュソンのアンフォラは部下に命じて自らが座る薪の山に火をつけるように命じている場面を描いている⁽¹³⁾。これらは既に前5世紀のギリシア世界においてクロイソスの運命について様々な話が人々の間で広まっていたことを窺わせるものであり、関心の高さを示すものである⁽¹⁴⁾。

このように、リュディア王国は長くギリシア人の関心と同情、さらには憧れの念を掻き立ててきた。ではなぜギリシア人は本来バルバロイと差別する異民族の国リュディアにかくも深い親近感と強い関心を抱き続けたのであろうか。そこにはペルシア戦争期以降形成されて行く異民族に対する自己優越的な差別意識とは異なった感性がギリシア人の間に働いていたのではないだろうか⁽¹⁵⁾。

1. リュディアとギリシア人の関係

メルムナス朝のリュディアとギリシア人との関係は奇妙な矛盾に満ちていた。メルムナス朝のリュディアは小アジア沿岸に点在するギリシア人植民都市に対しては侵略と征服を繰り返しながら、他方ではエーゲ海の島嶼部やギリシア本土の諸都市とは友好同盟関係を求め、これら都市や神殿に対しては後々にまで語り継がれるほどの莫大な寄付を行った。ギリシア人のほうも同じ民族に対するリュディアの侵略行為に対して別段敵意を掻き立てられている様子もなく、寧ろリュディアからの寄付や同盟の申し入れを歓迎する風であった。多くのギリシア人がサルデイスの宮廷を訪れ、リュディア王と親交を重ねているがその事を恥じる事はなかった。

ギュゲスに始まる歴代のメルムナス朝の王は小アジア西岸のギリシア諸都市の領土を侵し、スミュルナのように破壊するかエフェソスのようにリュディア王の宗主権下に従属させ朝貢を課したのである⁽¹⁶⁾。

ヘラクレス朝を倒し、メルムナス朝を建てたギュゲスは同時にリュディアの西に境を接するギリシア人に対する侵略戦争をはじめた人物でもあった。彼はミレトスとスミュルナに攻め込み⁽¹⁷⁾、マグネシアを制圧し⁽¹⁸⁾、コロフォンを占領したのである⁽¹⁹⁾。サデュアッテスはその治世の後半に11年に及ぶミレトスとの戦争を始めている⁽²⁰⁾。アリュアッテスはスミュルナを占領し⁽²¹⁾、クラゾメナイに侵攻し⁽²²⁾、ミレトスとは止むを得ず講和している⁽²³⁾。それはリュディア国内に侵入した遊牧民のキンメリア人との戦い⁽²⁴⁾や南のカリアへの遠征⁽²⁵⁾と同時に行われたものであった。

しかし歴代のリュディア王の中で最も露骨に戦争を仕掛けたのはクロイソスであった。ヘロドトスはクロイソスがエフェソスを手始めにイオニアとアイオリスの全ての都市を「様々な理由で襲い掛かったのであった。重大な理由を見つけだすことが出来た時には、それを口実とし、時には些細な理由で攻撃したのであった。」と述べている⁽²⁶⁾。その結果ハリュス河以西の小アジアの住民は、キリキア人とリュキア人を除いて、クロイソスの支配に服する

事となったのである⁽²⁷⁾。

同時にリュディア王はデルフォイと親密な関係を醸成し、ギュゲス⁽²⁸⁾やアリュアッテス⁽²⁹⁾、クロイソス⁽³⁰⁾はデルフォイの神託を伺いアポロンに多大な奉納物を収めている。また彼らはコリントスやスパルタなどのギリシア本土の諸都市とは親密な関係を結び、エーゲ海の島嶼部のイオニア人と友好同盟条約を結んでいる⁽³¹⁾。コリントスのペリアンドロスはアリュアッテスの下に300名ものケルキュラの男児を送ろうとし⁽³²⁾、スパルタはリュディア王による同盟条約締結の申し出を喜んで受け入れ、クロイソスによる金の無償提供に感謝して大型の青銅の混酒器を贈っている⁽³³⁾。

このようにギリシア人に対するリュディアの政策は所謂遠交近攻と称するものの典型であろう。後世にまで語り継がれたギリシアの神殿や都市に対する豪勢な奉納や寄付も単なる気前の良さではなく、これらをリュディアに繋ぎ止め好意的な世論を醸成しようとする政治的計算の上に成り立っていたのである。その意味では歴代のリュディア王による贈り物政策は成功したと言える。小アジアのギリシア諸都市に対する侵略戦争にも拘らず、歴代のリュディア王はギリシア人に対して好意的であったと評価され、彼らの各種の贈与は驚嘆の念を込めて語り継がれていったのである。

リュディアの軍事的圧力を正面から受けていた小アジアのギリシア人の態度にも矛盾したものを認める事が出来る。ギュゲス以来等しくその独立と安全を脅かされてきた小アジアのギリシア人諸都市が一致団結してこれに当たろうとする事はなかった。ミレトスがサデュアッテスとアリュアッテスの二代にわたってリュディアの脅威にさらされた時、キオスを除く諸都市はミレトスに援助の手を差し伸べる事はなかったと、ヘロドトスは伝える⁽³⁴⁾。そのキオスですら異民族の脅威に対してギリシア人の自由を守るためというような理由から援助したのではなく、かつてキオスがエリュトライと戦をした折にミレトスがキオスを支援したその恩義に応えるという類のものでしかなかった⁽³⁵⁾。

さらには、政治的にはリュディアと確執を抱えながらもこれらのギリシア

諸都市からは数多くのギリシア人がリュディア王の宮廷を訪れ、リュディア王はこれらの訪問者を歓待しているのである。ギリシア人を惹きつけたのは政治的理由からだけではなかった。黄金に象徴されるサルディスの富。ギリシア人の職人や芸術家に対する宮廷の需要。傭兵としての雇用の機会。そして華やかな宮廷文化。それは哲学者たちだけではない。亡命者たちはサルディスの宮廷に彙集し、リュディア王の保護を受けて権力の座への復活を試みた。商人たちはリュディアの織物や香料を求めてサルディスの市場を訪れ、芸術家や建築家、画工、それに彫刻家たちはリュディア王や貴族たちの注文を求めてサルディスの町に滞在したのである。なかにはサッフォーの女弟子のように、サルディスの宮廷の華やかさに魅せられてサルディスに住まいを移した女性たちもいた。

ヘロドトスはイオニアやドーリス、アイオリスのギリシア植民都市が悉くクロイソスに征服された後、当時世にあったギリシアの賢人の全てが代わる代わるサルディスを訪ねて来たと述べている⁽³⁶⁾。その中には既に紹介したアテナイのソロン⁽³⁷⁾やアルクメオン⁽³⁸⁾がいる。プリエネのピアス、或いはミュティレネのピッタコスがサルディスの宮殿を訪れ、クロイソスと話を交わしている⁽³⁹⁾。スキュティアの王でギリシアを訪れたアナカルシスはクロイソスに手紙を送り、黄金は要らないが、サルディスを訪れクロイソスと切に会いたいと書いている⁽⁴⁰⁾。コリントスの僭主ペリアンドロスは賢人たちに当てた手紙を記しているが、そこには手紙を出した前の年に彼らがサルディスに集まりリュディア王と会合した事に触れている⁽⁴¹⁾。

逆にリュディア王の側からも接触が図られている。歴代のリュディア王の中で最も活発にギリシア人との接触を働きかけたのはクロイソス王であった。しかし、その様な動きはクロイソスの独創であったというよりは、メルムナス朝が成立した時からリュディア王国の外交の底流であった。というのはカンダウレス王を殺してその王国と妃を手に入れたメルムナス朝初代のギュゲスはヘラクレス朝を支持するリュディア人の不満を抑えるためにギリシア本土のデルフォイの神託を利用しているからである⁽⁴²⁾。

その際重要視されたのはギリシア人の中での評判であった。デルフォイはメルムナス朝にとって対ギリシア政策の要石であった。リュディア王がデルフォイを重視し、たびたび豪勢な奉納を行ったということはデルフォイの権威と影響力を高める事になった。そして逆にリュディアはデルフォイの権威と影響力を利用したのである。クロイソスが神託の確かさを確かめたという話も、デルフォイの権威を高めるための世論操作でしかない。

プルタルコスにはクロイソスがアイソポスをペリアンドロスの許に派遣したと述べている⁽⁴³⁾。クロイソスはスパルタがギリシア最強である事を知ると⁽⁴⁴⁾ 同盟を申し入れる使節を派遣している。それ以前にトルナクスのアポロン像を作成するのに必要な金を無償で提供してもいる⁽⁴⁵⁾。ギュゲスは王位篡奪に伴うリュディアの内紛を回避するためにデルフォイの神託を利用した⁽⁴⁶⁾、アリュアッテスは自らが罹った病についてデルフォイの神託を伺っている⁽⁴⁷⁾、クロイソスはペルシアとの戦争に際して事の成否をデルフォイに尋ねている⁽⁴⁸⁾。

その様な交友の多くが伝説の類であって歴史的事実とは信じがたい⁽⁴⁹⁾ が、それでもギリシア諸都市の指導的な人物との密接な交流を反映しているものと思われる。しかしそれがリュディア王による素朴な善意というよりは政治的な計算のうえに為された行為であった事を窺わせる史料がある。前6世紀の詩人アルカイオスは権力闘争に敗れサルディスに亡命し、クロイソスから2000スタテルもの資金を援助してもらった事を語っている⁽⁵⁰⁾。それがために後世のギリシア人はアリュアッテスを一方では傲慢であったと評しながら、他方では「最も賢明 (sophronestatos)」で「最も正しい (dikaiotatos)」と賞賛しているのである⁽⁵¹⁾。

そしてその背景にリュディア人とイオニアのギリシア人との長い親密な関係があった。ジョージスはイオニア諸都市の王家や貴族がカリヤ人やリュディア人と婚姻を通じて縁戚関係にあったと主張する⁽⁵²⁾。特にイオニア人がリュディア人に親密な感情を抱くのはカウストロスやヘルモス、マイアンドロスの沃野を占拠していたカリヤ人に対して共通の利害を有していた事に求め

る⁽⁵³⁾。共にカリア人を駆逐・制圧しつつイオニアのギリシア人貴族とリュディア人領主の領地はヘルモス河やマイアンドロス河下流域で混じり合い、婚姻を通じて互いの友情と家族の絆を育み、狩猟を共に催したり贈り物を交換し合ったり、逆に反目し合ったり襲撃し合ったりもする、その様な関係にあった⁽⁵⁴⁾。

2. ギリシア人の異民族観

ギリシア人が東方のオリエント世界に惹きつけられたのは金や銀、銅などの鉱物資源であった。サルゴン2世が前714年にウラルトゥを襲撃しカルディの神殿を略奪した時、大量の金製品や銀製品、青銅製の容器と並んで3,600タラント、すなわち109トンもの青銅の塊を手に入れている⁽⁵⁵⁾。これは東方世界が如何に鉱物資源に恵まれていたかを示すものであろう。ブラウンは、様々な物品の中で加工されたそして加工されていない金属がアルミナを訪れた最初のギリシア人交易者にとって特に魅力的であったに違いない、と述べている⁽⁵⁶⁾。同じことはサルディスに惹きつけられたギリシア人にも当て嵌まる。キューロスの遠征軍には多くのギリシア人が傭兵として混じっていた。その中にはおそらく長くサルディスにいてボイオティア訛りの方言を留めながらも、リュディアの風習にかぶれ両耳にピアスの穴を開ける、アポロニデスのような人物もいたのである⁽⁵⁷⁾。

ギリシア人の異民族に対する理解の仕方には彼ら独特の様式がある。ギリシア人は異民族を「バルバロイ」と呼び、自らを「ヘレネス」と呼んで区別した。バルバロイとは後世英語化された barbarian（野蛮人）という差別化された意味内容を本来は持たず、ただ単に理解不能な言葉を話す人々を擬音語的に表わした言葉でしかなかったのである⁽⁵⁸⁾。異民族を初めて「バルバロイ」と呼んだのはヘカタイオスであったとされる⁽⁵⁹⁾。しかし後になると自由の民であり文化的に優れたヘレネス（ギリシア人）とは対立する不自由、真正のデスポティズム、精神的に劣等な異民族を意味するようになった⁽⁶⁰⁾。

しかし、その様な理解とは別に異民族をも自分たちの神話体系の中に取り

込んで行く事で当該民族の歴史的な位置付けやギリシア人との関係を象徴的に表現しようとする伝統が彼らにはあった⁽⁶¹⁾。

ジョージスによると、ギリシア人は彼ら自身の来歴を神話伝承の中に位置付ける営為を重ねると共に、彼らが遭遇し、何らかの形で交渉を持つに至った諸民族を自分たちの神話伝承の中に位置付ける事によって理解しようとしたのである⁽⁶²⁾。ギリシア人には幾つかの適当な候補が神話伝承の中に用意されていた。大きく分けると一方はヘラクレスやオデュッセウスなどのギリシア人の英雄たちであり、他方はトロイア戦争の際にトロイア方で戦ったサルペドンやヘクトルなどのアジアの英雄たちである。ギリシア人の英雄をその民族の祖先にするのかそれともトロイア方の英雄を祖先にするのかはその民族とギリシア人との関係の善し悪しによるものであった⁽⁶³⁾。

前5世紀の歴史家ヘロドトスはギュゲスの事件以前リュディアを統治していたのはヘラクレスの末裔であったと述べている⁽⁶⁴⁾。それがカンダウレスの時代に王妃にそそのかされたギュゲスによって王位を篡奪されたのである。従ってギュゲスに始まるメルムナス朝はヘラクレスと結びつかないはずであるが、ギリシアの歴史家の中にはこのギュゲスをもヘラクレスと結び付けてしまっているものもある。ギリシア人はリュディアの王朝メルムナダイすら自らの英雄ヘラクレスと結び付けて説明している。後1世紀のアポロドロスはリュディア人の女王オンファレがヘラクレスとの間にアゲラオスという子を成し、それがクロイソスの祖先であると記している⁽⁶⁵⁾。

リュディア人の王族や貴族がギリシア人と親族関係にあったことはエフェソスの僭主ピンダロスの祖父がリュディア王のアリュアッテスであったと伝えられていることに端的に示されている⁽⁶⁶⁾。クロイソスにはパンタレオンという異母兄弟がおり、その母はイオニアの出身であった⁽⁶⁷⁾。また、リュディア王の妹の一人が嫁いだのはミレトスという名の人物であった⁽⁶⁸⁾。

ホメロスには何人かのリュディア出身の英雄が登場する。マイオニア人の領主、ボロスの子のフェイスロス⁽⁶⁹⁾とオトリュンテウスの子のイフィティオンである⁽⁷⁰⁾。前者は肥沃なタルネの出身とされ、後者は雪を頂くトゥモロ

スのふもと、ヒュデの出身とされる。『イリアス』第五卷四四節の古注によればタルネとはサルディスの事とされ、雪を頂くトゥモロスの麓の豊かな町ヒュデとはサルディスの町を指している⁽⁷¹⁾。またマイオニア人とはリュディア人と呼ばれる以前の名称であったとヘロドトスは伝えている⁽⁷²⁾。

彼らがいずれもギリシア人の名前で呼ばれている事はリュディア人とギリシア人とのある種の親密さを反映したものであろうし、彼らがいずれもギリシア人の英雄の手にかかって殺されている事はリュディア人に対するギリシア人の民族的優越感を端的に示すものであろう。前者はイドメネウスに殺され、後者はアキレウスに殺されている。ヘラクレイダイ最後の王カンダウレスはギリシア人の中ではミュルシロスと呼ばれていた事をヘロドトスが伝えている⁽⁷³⁾。

『イリアス』に登場するマイオニア人はトゥモロス山とギュゲス湖の間に住んでいるとされ⁽⁷⁴⁾、リュディア人と前7世紀には同定された⁽⁷⁵⁾。そして住民は戦車に乗って戦う戦士であり馬を飼う者として知られている⁽⁷⁶⁾。ホメロスに登場するマイオニア人は質実であり、象牙で出来た馬の頬当てが王によって蔵に仕舞い込まれ他の騎士たちによって妬みを買っていた⁽⁷⁷⁾。考古学的にも前8世紀末以前には物質的に繁栄していたとか住民の生活が外国からの輸入品に囲まれていたというような状況ではなかったと報告されている⁽⁷⁸⁾。それにもかかわらず、住民は多くの人口を誇り好戦的で、首長たちの下に組織化されそれぞれの農村に集中していたと考えられている⁽⁷⁹⁾。ギリシア人たちはサルディス以外の都市について言及していないがそれは語るべき都市がなかったためであろう⁽⁸⁰⁾。ローバックはリュディアをサルディスという一大中心地を伴った農民と牧人の村落からなる地方と想定すべき事を提案している⁽⁸¹⁾。サルディスは産業と交易の中心地として発展して行ったが、それはギリシア人の影響と王や封建的貴族の庇護と密接に結びついている⁽⁸²⁾。

リュディアの国土についてのギリシア人の印象は前5世紀の初頭イオニア反乱の直前にスパルタを訪れたミレトスの僭主アリスタゴラスの言葉によってよく示されている。アリスタゴラスはスパルタ王のクレオメネスに銅製の

円盤の世界地図を指し示しながら「リュディア人の住む土地は豊沃で、銀の産出額は他に類がありません」と述べている⁽⁸³⁾。

クロイソスの運命について多くのギリシア人が強い関心を持っていたことは「はじめに」のところで触れた。メルムナス朝の始祖ギュゲスについてもギリシア人は強い興味と関心を抱いていたようである。プラトンは『国家』の中で次のような幻想的な話を伝えている⁽⁸⁴⁾。

ギュゲス（リュディア人の始祖と記されるだけで、ギュゲスという名前は出てこない）は王に仕える羊飼いであった。彼は地震によって開いた穴の中に入って行く。穴の中にはいろいろな不思議なものがあり、それに混じって銅の馬があった。その馬には小さな扉があり、その扉から中を覗いて見ると、大きな死体が収められていた。ギュゲスはその死体の指から黄金の指輪を抜き取り、自分の指に嵌める。指輪には姿を隠すという不思議な力があった。その力を知ったギュゲスは姿を隠して王宮に入り込み、まんまと王妃と通じて王を殺害するのに成功し、リュディアの王位を手に入れたのである。

ヘロドトスの伝える話はプラトンと正反対である⁽⁸⁵⁾。ヘロドトスではギュゲスはカンダウレス王に仕える側近であった。王に無理強いされて王妃の寝室に忍び込んだギュゲスは部屋に入って来る王妃の姿を目にする。その事を知った王妃はギュゲスに王を殺して自分と結婚するか自殺するのかを迫るのである。王妃の恐ろしい要求を拒みきれなかったギュゲスは仕方なくカンダウレス王を殺害し、リュディアの王位を手に入れる。カンダウレスを支持する党派とギュゲスは内戦を戦う事になるが、デルフォイの神の調停によって両者は和解する。

プラトンの話ではギュゲスは積極的に王妃と通じ、王を殺害している。ヘロドトスの記事では王妃の要求に抗し切れなくなったギュゲスが不承不承実行に踏み切ったのである。

紀元前後頃のダマスキスのニコラオスはプラトンのようにお伽噺めいてはいないが、護衛兵（doryphoros）であったギュゲスが王を殺害し王国と王妃を手に入れたと伝え、ギュゲスによる王位篡奪への積極的関与を伝える⁽⁸⁶⁾。

このようにギリシア人はクロイソスの最後についてだけではなく、ギュゲスによる篡奪についても様々な逸話を語り継ぎ、書き残したのである。この事はリュディアに対するギリシア人の関心の高さと東方の君主のア・モラルな側面をギリシア人が強く意識していた事を物語っていると言えよう。

またアルキロコスによって伝えられるギュゲスの富、ヘロドトスによって伝えられるクロイソスの財宝と気前の良さは東方の君主に対するギリシア人のもう一つの心像、豪奢な生活と傲慢さ、を示している⁽⁸⁷⁾。彼らはこの信じがたいほどの富と傲慢とも思える気前の良さに惹きつけられたのだ。

3. リュディア人にとってのギリシア人

リュディア人にとってギリシア人はどのような位置を占めていたのであろうか。リュディア人貴族の所領がカウストロスの平原やヘルモス河、マイアンドロス河の下流域に拡大し、イオニア諸都市のギリシア人、特にイオニア人貴族の所領と隣り合っており、両者に間に略奪や襲撃を伴う対立が長年にわたって続いてきた事は疑い得ない⁽⁸⁸⁾。また、ギュゲスの王位篡奪に始まる歴代のリュディア王たちの帝国主義政策はリュディアとギリシア人との間に緊張した状態を醸成していた⁽⁸⁹⁾。しかし同時にリュディア人貴族とギリシア人貴族の間には婚姻を通じて密接な親族関係を形成しており、ギリシア人にとってリュディア人は単なるバルバロイではなかった。

リュディアとギリシア人との交流は青銅器時代までさかのぼる事が出来る。サルディスを発掘しているハーヴァード・コーネル両大学のチームは既にサルディスからはミケーネ土器が出土している事、前1200年頃のカタストローフにもかかわらずギリシアからの土器の輸入は途絶える事はなく後期ヘラディックⅢC期からプロトジオメトリック期に至るまでギリシアの土器が輸入され続けている事、また前900年頃に現れるリュディアの彩色ジオメトリック土器にギリシアのプロトジオメトリック期の土器が強く影響を及ぼしている事を明らかにしている⁽⁹⁰⁾。

ローマ時代にアジアと呼ばれた地域はヒッタイト文書に登場するアッシュ

ワに相当すると考えられている⁽⁹¹⁾。アッタリッシヤシュ（アッヒヤの男）によってその国土から放逐されたマッドウツタシュなる人物がヒッタイト王の前に現れ、小アジアの西部に領土を与えられている事をヒッタイトの文書は伝えている⁽⁹²⁾。その後継者の時代になるとマッドウツタシュはアッタリッシヤシュと手を組んでヒッタイトの領土を侵略するようになる⁽⁹³⁾。

このヒッタイト文書に登場するマッドウツタシュという名前が後のリュディア王の名前であるアリュアッテスとかサデュアッテスという名前と比較され⁽⁹⁴⁾、リュディア人の名前だと考えられている⁽⁹⁵⁾。これらの事実からピードリーはリュディア人が前1200年頃のカタストローフのときにこの地に移住してきた民族ではなく、青銅器時代には既にこの地に住み、ヒッタイト王の手によってサルディスの町が破壊されたとしても、リュディア人自身は鉄器時代に入るまで変わることなくこの地に住み続けたと論じるのである⁽⁹⁶⁾。

青銅器時代から初期鉄器時代にかけての時期は本稿の対象外ではある。しかしアッシュワの地に住み続けたリュディア人が青銅器時代から小アジア西岸のギリシア人と接触を保ち、時には対立を孕みながらも時には同盟関係を結んで東のヒッタイト帝国の国境を犯し、宮殿体制の崩壊にも拘らず彼らとの交易は所謂暗黒時代を通じて維持され続けたということ、そしてリュディア人の陶工が輸入品から多大な影響を受けたという事実は注目に値する。

リュディア人はギリシア人の造形芸術の才能は高く買っていたけれども、ギリシア人の生活様式や言語に影響を受ける事はなかった。ギリシア人の造形芸術の才能を高く買っていた事はリュディア王がギリシア人の工人を雇用して作品を作らせ、それをギリシアの神殿に奉納したと伝えられている事から明らかである。キオスのグラウコスはアリュアッテスの注文に応じて鉄の溶接の技術を使って混酒器の台を作り⁽⁹⁷⁾、サモスのテオドロスはクロイソスの注文に応じて巨大な黄金製の混酒器を製作している⁽⁹⁸⁾。

サルディスにおける発掘はギリシア人商人たちの他に建築家や彫刻家⁽⁹⁹⁾、陶工⁽¹⁰⁰⁾ など多くのギリシア人がサルディスの町に住み、リュディア人の注文に応じて建築や彫刻の製作などに活躍した事を明らかにしてきている。サ

サルディスにおける彼らの創作活動は極めて旺盛で、クロイソスの時代にはサモスやミレトスなどのイオニア諸都市の流派と拮抗しうる流派がサルディスにおいて生み出されていた⁽¹⁰¹⁾。

しかしギリシアの造形芸術の流行やギリシア産土器の流入がリュディア人の生活や言語のギリシア化を意味するわけではない⁽¹⁰²⁾。ギリシア人がサルディスに居住しサルディスにおいてギリシア語の使用が確認されているにもかかわらず、ギリシア語の使用はごくわずかな人々に限られており、言葉のギリシア語化は前3世紀の終わりまでは生じなかった⁽¹⁰³⁾。

象牙細工や金細工においてリュディア人の工房は優れた作品と製作し、クレタ島やエフェソスなどギリシア諸都市に輸出され、高く評価された⁽¹⁰⁴⁾。サルディスからは数多くの金製の耳輪が出土しており、女性に限らず男性も耳輪を装着する事がリュディア人の風俗であった事はクセノフォンが伝える逸話からも想像できる⁽¹⁰⁵⁾。土器の分野でもギリシア人陶工の存在と活発な製作活動が報告されているにもかかわらず、リュディア人の庶民が使用する土器にはあまり強い影響を及ぼしてはおらず、幾何学様式の伝統が残っていた⁽¹⁰⁶⁾。詩のような文学はリュディア人の間では評価されなかった。彼らが評価したのは視覚に訴える造形芸術だったのである⁽¹⁰⁷⁾。

同じような問題が横たわっている。リュディアやシリアなどでギリシアの土器は大量に出土している。出土したギリシアの土器がそれを購入し使用した人々のギリシア化を証明しているのだろうか。この点について考古学者たちは否定的である。

ブラウンは東方ではギリシアの彩文土器が広い範囲にわたって点在しているけれども、オリエントで発見されているギリシアの土器はその数量がどれほどであったとしてもオリエント人による輸入を示してはおらず、それを自分で使用するギリシア人の存在を示しているだけであると述べ、オリエントはギリシアの芸術にあまり関心を持たなかったと指摘している⁽¹⁰⁸⁾。

リュディアにおいても同様の指摘がサルディスを発掘した考古学者たちによって主張されている。ローバックは、前6世紀になると輸入品の品目はよ

り広範囲となり、地元の土器に対するギリシアの土器の影響は顕著ではあるけれども、それでも量は僅かであって、品質的に高いものはなかった、と言う⁽¹⁰⁹⁾。エトルリア人とは違って、リュディア人貴族は容易に手に入る良質のギリシア土器には関心を持たなかったのである。

ローバックはコリントスの土器は前6世紀の初頭に現れるが、サルディスから出土しているのはアリュバロスが3個、オルペーが1個、それにその他の土器の破片が数個でしかないとする⁽¹¹⁰⁾。しかし、この数字はその後大きく変化している。1996年にいたるサルディスでのアメリカチームの発掘調査はペルシア時代までの土器及び土器片を合わせてコリントスのものが148点、アッティカのものが31点、ラコニアのものが15点出土している事を報告している⁽¹¹¹⁾。サルディスにおいて発掘されている最古のコリントス製の土器は後期ジオメトリック期の初期に属するオイノコエと中期に属するコテュレの断片である⁽¹¹²⁾。アッティカの土器に関してもサルディスから出土している最古のものは初期ジオメトリックの片耳杯である⁽¹¹³⁾。

リュディア人にとってギリシア人に対する関心が高かった理由のひとつは傭兵としての存在である。所謂ラッサム円筒碑文は「ルッディ（リュディア）」の王「グゲ（ギュゲス）」が使節の派遣を停止し、アッシリアから反乱を起こしたエジプト王「トゥシャミルキ（プサンメティコス）」を支援した事に言及し、アッシュールバニパルは「彼の身体が彼の敵の前に投げ出されますように、〔彼の敵が〕その手足を持ち去りますように」とアッシュル神とイシュタル神に祈っているのである。アッシュールバニパルははっきりとギュゲスが「余の主権の頸木をかなぐり捨てた、エジプトの王、トゥシャミルキの下に彼の兵を送った」と述べている⁽¹¹⁴⁾。ディオドロスはプサンメティコスがイオニア人とカリヤ人を擁してエジプトの支配権を獲得した事に言及している⁽¹¹⁵⁾。ここに出てくるイオニア人とカリヤ人はギュゲスがエジプト支援のために送り込んだ援軍ではなかったか。そうではないとしても、エジプト王がイオニアやカリヤから傭兵を調達するにはギュゲスの承認は必要であつたろう。

その後も歴代のエジプト王は新バビロニアに対抗するためにギリシア人傭兵を用いている⁽¹¹⁶⁾。後にペルシアのカンビュセスがエジプトに進攻した時、ペルシオンでの戦いでギリシア人とカリア人から成る傭兵部隊がペルシア軍と激しい戦いを交えた事をヘロドトスは伝えている⁽¹¹⁷⁾。これらはリュディアの東地中海世界における外交の上でエジプトとの同盟関係が必須であった事、またエジプトをリュディアに繋ぎ止めておく重要な手段の一つがその宗主権下にあるギリシア人やカリア人傭兵の提供であった事をうかがわせる。

ギリシア人傭兵はエジプトとの関係で重要であったばかりでなく、リュディア自身にとっても重要であった。ダマスクスのニコラオスは、父の命に従いアドラミッティオンの総督をしていたクロイソスがエフェソスに赴いてパンパイスから金を借り、傭兵を集めた事を伝えている⁽¹¹⁸⁾。このことはリュディアの軍事力の重要な部分をギリシア人傭兵が占めていた事を示しているのだろう。

お わ り に

メルムナス朝のリュディアとギリシア人の関係はメルムナス朝の王国を相続したアケメネス朝ペルシアに引き継がれていった⁽¹¹⁹⁾。キューロスに対するスパルタの警告やコルシカ島への移住を決意したフォーカイアの人々の不安にもかかわらず小アジアに住むギリシア人と東方の帝国との関係は大きく変わる事はなかった。サルディスの総督府やスーサの宮廷には数多くのギリシア人が訪れ、ある者は亡命者としてペルシア人権力者の支援を求め、あるものは医者として或いは工人として、さらには傭兵としてペルシア人権力者によって雇用され、ある者は商人として、またある者は旅行者としてペルシア帝国下の各地を訪れたのであった。このような人々の存在はヘロドトスやトゥキュディデス、クセノフォンなどの作品を通じて知る事が出来る。

イオニアの反乱、失敗に終わったギリシアへの遠征、アテナイを盟主とするデロス同盟との対峙、キューロスの反乱に始まるスパルタとの確執にもかかわらずペルシアとギリシア諸都市との関係が途絶える事はなかった。リュ

ディア王と同じようにペルシア王は使節を直接ギリシア諸都市に派遣するか、或いは亡命者を通じて間接的に働きかけるか、さらには豊富な資金を提供する事によって政治的影響力を行使するか、とにかく多岐にわたる手段を介して両者の関係は維持されたのである。

ヘレネスとバルバロイという二項対立的なイデオロギーの創作と宣伝にもかかわらず、ペルシアとギリシア人との関係が全てこの理念によって律せられていたわけではなかった⁽¹²⁰⁾。アテナイで活躍した政治家や文筆家はヘレネスとバルバロイとの和解しがたい対立の感情をあおったが、全てのギリシア人がその様な対立感情を共有していたわけでもなかった。ギリシア人は現実主義者であった。自分たちの利益となるのならばペルシアと結びつき、ペルシアの力を利用する事も厭わなかったのである。

このような状況は既にメルムナス朝のリュディアとギリシア人の間に見られる。ここに一つの伝統がギリシア人とオリエントの諸勢力との間に醸成されていた事を私たちは知るのである。メルムナス朝のリュディアとギリシア人の間に作り出されていった関係こそはその後の東方とギリシアの関係の原型であった。

リュディア人は王朝的観点からギリシアに対して強い関心を寄せていた。小アジアのギリシア諸都市に対する宗主権を確立し、ギリシア本土の諸都市とは友好関係を維持強化することによってメルムナス朝の支配を強固なものとしようとしたのである。傭兵や同盟軍の確保もまた彼らの関心事であった。ギリシア文化に対する関心も王宮を中心としていた。ギリシア人の工人や建築家はリュディア王や貴族の注文に応じてその作品を製作した。しかし彼らの活動がリュディア人の庶民レベルにまで大きな影響を及ぼす事はなかった。

メルムナス朝時代のギリシア人は後世のギリシア人の異民族観を代表する文化的優越感と差別意識でもってリュディアと接する事はなかった⁽¹²¹⁾。リュディアの侵略をギリシア人に対する共通の脅威とみなす風潮はなかったし、リュディア王からの各種の恩恵付与や友好・同盟関係の申し出を歓迎する向きすらあった。

近代の歴史家にはオリエントに対するギリシアの影響を過大に評価する傾向があった。それは近代ヨーロッパ文化への自信とアジアに対する蔑視と決して無関係ではなかった。近代ヨーロッパ文明のめがねを掛けてではなく、等身大のオリエント世界とギリシアの関係を見ること、その事が大事であろう。

注

- (1) サルディスは地中海から約百キロの内陸にあり、エフェソスからの行程は徒歩で三日とされる：J. G. Pedley, *Sardis in the age of Croesus*, (Norman 1968), 21
- (2) Edouard Will, *Le monde grec et l'orient*, (Paris 1972) 53.
- (3) Sappho F 96, 1-9.
- (4) Archiloch. 15.
- (5) Hdt. 1. 30-33; Plut. *Solon*, 27.
- (6) Hdt. 6. 125.
- (7) Hdt. 1. 20.-22.
- (8) Hdt. 1. 70.
- (9) Hdt. 1. 85-87.
- (10) S. Smith, *Babylonian Historical Texts* (London 1924) 116. ; A. T. Olmstead, *History of the Persian empire*, (Chicago and London, 1970^{6th. imp.}), 40：オルムステッドはクロイソスを殺したとするナボニドスの年代記の記述はキュロスの公式の見解に過ぎないとする。実際にはクロイソスはオリエントの習慣に従って捕らえられた王に加えられる恥辱を免れるために自殺したと考えている。； A. R. Burn, *Persia and the Greeks*, (Stanford 1984^{2nd ed.}) 43：ナボニドスの年代記の Lu [...] をリュディアと読み取るのは魅力的ではあるが、現在では専門家によってその様な読みは不可能だと非難されているとして退けている。
- (11) Hdt. 1. 87.
- (12) Bacchylides, *Epinicia* 3. 23-62.
- (13) J. Boardman, *Athenian red figure vases: The archaic period*, (London 1996^{1st.}) n. 171.
- (14) 藤縄氏はヘロドトスの歴史観に流れている因果応報の考えをクロイソスの事件と関連して論じている。藤縄謙三、『歴史の父 ヘロドトス』, 新潮社, 1989年, 36-37頁。
- (15) ギリシア人の自民族のアイデンティティと異民族に対する意識については平田

隆一氏が「古典古代における「ヨーロッパ」概念——他者意識と自己認識に関する覚書——」『ヨーロッパ文化史研究』第2号、2001年、において興味深い論を展開しておられる。特に17-19頁。自己認識が他者の存在によって喚起された意思であるというという指摘（17頁）はヘレネスとバルバロイにも適用できる。またアドキンスはペルシア戦争こそが異民族に対するギリシア人の態度を変化させ、ギリシア人をバルバロイから区分させるきっかけとなったと指摘している。：A. W. H. Adkins, *Moral values and political behaviour in ancient Greece* (London 1972) 58-59.

(16) Hdt. 1. 27.

(17) Hdt. 1. 15；スミュルナに関しては、Mimnermus, F13.; Plut. *Parallera minora* 30 (312 E, F)

(18) Nicolaos Damasc. *FGH* 90 F62.

(19) Hdt. 1. 15.

(20) Hdt. 1. 18.

(21) Hdt. 1. 16; Nicolaos Damasc. *FGH*. 90 F 64.

(22) Hdt. 1. 16.

(23) Hdt. 1. 22.

(24) 小アジアへのキンメリア人の侵入についてはアッシリアの同時代史料があり、後世のギリシア人の伝承との交差検証が可能である。アッシリアの史料によればギュゲスの時代に既にキンメリア人の侵入にリュディアは苦しめられており、ギュゲスはキンメリア人との戦いで命を落としている。ギリシア側の伝承ではキンメリア人が侵入したのはギュゲスが亡くなった後とされているが、この点に関するギリシア側の伝承には年代的不正確さがある事を認める事ができる。：J. D. Pedley, *Ancient literary sources on Sardis*, Archaeological Exploration of Sardis Monograph 2 (Cambridge, Mass. 1972) (以下 *ALSS* と略す). n. 292-295; Hdt. 1. 15-16.

(25) Nicolaos Damasc. *FGH*. 90 F 65.

(26) Hdt. 1. 26. 3.; エフェソスに関しては Aelian. *Varia historia*, 3. 26; DS. 9. 2 5. 1-2; Polyaeus, 6. 50.

(27) Hdt. 1. 28.

(28) Hdt. 1. 13-14.

(29) Hdt. 1. 19; 25.

(30) Hdt. 1. 47-55.

(31) Hdt. 1. 27.

(32) Hdt. 3. 48.

(33) Hdt. 1. 69-70.

(34) Hdt. 1. 18.

- (35) *Ibid.*
- (36) Hdt. 1. 29.
- (37) Hdt. 1. 29-33.
- (38) Hdt. 6. 125.
- (39) Hdt. 1. 27.; ピッタコスについては Plut. *De fraterno amore* 12 (484C) を参考に参照のこと。
- (40) Diogenes Laertius 1. 105.
- (41) Diogenes Laertius 1. 99.
- (42) Hdt. 1. 13.
- (43) Plut. *Septem sapientium convivium* 4 (150A)
- (44) Hdt. 1. 56.
- (45) Hdt. 1. 69.
- (46) Hdt. 1. 13.
- (47) Hdt. 1. 19.
- (48) Hdt. 1. 53-55.
- (49) クロイソスとソロンとの邂逅の話は前 6 世紀の間に作り上げられていったものと思われる。ピードリーによれば、前 6 世紀の間にクロイソスの運命とソロンの教えが組み合わされるようになり、前 5 世紀の初めにはクロイソスの物語に哲学的な意味が付け加えられ、ヘロドトスの時代までにクロイソスの物語がソロンの伝記の中に定着するようになっていた。Pedley, 1999, 83.
- (50) Alcaeus, F 116 (69).
- (51) Nicolaos Damasc. *FGH* 90 F 64.
- (52) Pericles Georges, *Barbarian Asia and the Greek experience: from the archaic period to the age of Xenophon*, (Baltimore & London, 1994) 13. この問題については後述。
- (53) 24.
- (54) 23.
- (55) T. F. R. G. Braun "The Greeks in the near east", *CAH*. III-III (1982), 12.
- (56) Braun, 12.
- (57) Xen. *Anab.* 3. 26; 31.
- (58) G. Walser, *Hellas und Iran*, (Darmstadt 1984), 1.; ホメロスは『イリアス』の中でカリア人を barbarophonoi と呼んでいる: Homer. *Ilias*. 2. 867; ギリシア人自身エジプトでは自らを alloglossoi, すなわち土地の者とは違った言葉を話す人々、と呼んでいる: M-L. 7 (a) 4; Hdt. 2. 154. 4.
- (59) Braun, 5; Heraclitus, B. 107 D-K
- (60) Walser, 1.
- (61) テュロスの王子カドモスがエウロパの探索のためにフェニキアの地を後にし、

ギリシア各地を訪れ、最後はテバイに入植したという伝承はホメロスやヘシオドス以降に創作されたもの、というブラウンの指摘はギリシア人が何時頃から異民族や自分たちの来歴を神話という形で語るようになったのかを知るうえで興味深い。: Braun, 7.

- (62) Georges, 9.
- (63) Georges, 16.
- (64) Hdt. 1. 7.
- (65) Apollodorus, *Bibliotheca* 2. 7. 8; ALSS. n. 2.
- (66) Aelian. *Varia historia* 3. 26.
- (67) Hdt. 1. 92.
- (68) Nicolaos Damasc. *FGH*. 90 F63.
- (69) Homer. *Ilias* 5. 43-44.
- (70) Homer. *Ilias* 20. 382-385.
- (71) Str. 9. 2. 20; 13. 4. 6.; Eustathius, *Commentarii ad Homeri Iliadem* 366. 15-20:「地理学者によればある人々はヒュデとは、かつてキンメリア人に占領されたリュディア人の王都サルディスそのものというよりはサルディスのアクロポリスのことであると言っている。彼が言うところによると、トゥモロスは、サルディスを俯瞰し、頂には地の利に恵まれた、ペルシア人の作品である白大理石でできたエクセドラ（屋根付の歩道）を擁している。」
- (72) Hdt. 1. 7.
- (73) Hdt. 1. 7.
- (74) Homer. 2. 864-66.
- (75) Hanfmann, *AJA*. 52 (1948) 151ff.; C. Roebuck, *Ionian trade and colonization*, (Chicago 1984) 52.
- (76) Homer. 3. 401; 18. 291; 10. 431.
- (77) Homer. 4. 141ff.
- (78) Hanfmann, 151ff.
- (79) Roebuck, 52.
- (80) Büchner, "Lydia", *RE*. 13 (1924) 2124.
- (81) Roebuck, 52.
- (82) *Ibid*.
- (83) Hdt. 5. 49. 5.
- (84) Plat. *Res Publica*, 359d-360b. cf. Cicero, *De officiis* 3. 9.
- (85) Hdt. 1. 8ff.
- (86) Nicolaos Damasc. *FGH* 90 F47.
- (87) Archilochus, 15; Plut. *De exilio* 599 E; Alexander Aetolius, *Anthologia palatina* 7. 709.

- (88) *Supra*. n. 55.
- (89) ジョージスはエフェソスやコロフォン、ミレトスなどのイオニア諸都市に残存するヘラクレス朝の影響力を払拭するためにメルムナス朝の歴代の王はこれらの都市に対する攻撃を繰り返したとする：Georges, 26.
- (90) J. P. Pedley, *Sardis in the age of Croesus*, (Norman 1999^{internet}) 28-30.
- (91) O. R. Gurney, *The Hittites*, (Harmondsworth 1981) 58. ; ピードリーはサルディスをアッシュワの中心地であったと推定する。Pedley, 26.
- (92) Gurney, 27-28. Gurney はトゥドゥハリヤシュ 4 世の時代（前1250-20年）と考えている。; cf. Von W. Helck, “Zur Keftiu-, Alašia- und Ahhijawa-Frage”, in: H-G. Buchholz (ed.), *Ägäische Bronzezeit*, (Darmstadt 1987), 225. Helck によればマッドワッタ文書はヒッタイト新帝国の初期に属する。
- (93) Gurney, 28.
- (94) 28.
- (95) Pedley, 1999, 26.
- (96) 30.
- (97) Hdt. 1. 25.
- (98) Hdt. 1. 51.
- (99) Pedley, 1999, 100.
- (100) Pedley, 1999, 112-113.
- (101) 107 ; 116. リュディア人が大きな関心を寄せていたのが墓の建設であった (Pedley, 1999, 100.)。キュベレの祠は様々な形でギリシア人の活躍を髣髴させる。女神はキトンの上にヒマティオンを羽織り、祠の前面と背面には人物像を描いた18枚の羽目板がある。そこにはアキレウスの父にまつわる情景や、ネメアの獅子と戦うヘラクレス、ペロプスと同定される御者、ケンタウロス、ブリアモスの死の場面、エレクトラに助けられてアイギストスを殺害するオレステスが描かれている (Pedley, 1999, 104; 106.)。サモス派の彫刻やミレトス派の彫刻、エフェソスのアルテミス神殿の浮き彫りとの様式的な類似が指摘されている (106)。前600年頃のコレー像が羽織っている衣装はサモスのコレー像やルーブルにあるオーセールの女性像のような初期のクソアノン像と類似しているとされる (106)。
- (102) 107.
- (103) 108.
- (104) 108f.
- (105) 112.
- (106) 113.
- (107) 113. 前7世紀末のアルクマンは、もし彼がサルディスに住まいすれば決して詩人になることはなくキュベレの祭典に際して宦官のようにシンバルを奏するキュベレに仕える僧となっていただろうと語っている。

- (108) Braun, 5.
- (109) Roebuck, 57-58.
- (110) 58: *Sardis*, 1, 154; 119, fig. 125; *AJA*. 18 (1918) 432.
- (111) J. S. Schaeffer, N. H. Ramage and C. H. Greenewalt, Jr., *The Corinthian, Attic, and Laconian Pottery from Sardis*, Archaeological Exploration of Sardis Monograph 10 (Cambridge, Mass. 1997). ペルシア時代を含めるとサルディスから出土しているアッティカの土器及び土器片は586点に達する。
- (112) J. S. Schaeffer, "The Corinthian pottery: The finds through 1990," 3 in: Schaeffer, Ramage and Greenewalt.
- (113) Ramage, "The Attic pottery: The finds through 1990," 66; 121 in Schaeffer, Ramage and Greenewalt.
- (114) J. D. Pedley, *ALSS*. 82; D. D. Luckenbill, *Ancient records of Assyria and Babylonia* II (Chicago 1927) 297-298; 最近はトゥシャミルキとは読まれず、アッシリア名で読まれているという指摘をオリエント史研究者から受けた。*Der Kleine Pauly*, Bd. 4, (München) 1979, s.v. Psammetichos によればナバシェズィバンニという名を与えられている。
- (115) Diod. 1. 66. 12.
- (116) Braun, 21.; A. R. Burn, *Persia and the Greeks*, (Stanford 1984) 31.
- (117) Hdt. 3. 11.; Hermotybies (槍兵) や Kalasiries (若きシリア人) と呼ばれる戦士身分の兵士がギリシア人やカリア人傭兵と肩を並べて戦っている。Burn, 85.
- (118) Nicolaos Damasc. *FGH*. 90 F65.
- (119) J. M. Balcer, "The Greeks and the Persians: the process of acculturation", *Hist.* 32 (1983) 257-267; F. Bourriot, "L'empire achéménide et les rapports entre Grecs et Perses dans la littérature grecque du V^e siècle", *L'Information Historique* 43 (1981) 21-30; A. R. Burn, *Persia and the Greeks* (Stanford 1984^{2nd ed.}); P. Green, *The Greco-Persian Wars* (Berkeley, Los Angeles 1996); D. Konstan, "Persians, Greeks and empire", *Arethusa* 20 (1987) 59-73; M. Vickers, "Interactions between Greeks and Persians", *Achaemenid history* 4 (1986) 253-262; G. Walser, "Zum griechisch-persischen Verhältnis vor dem Hellenismus", *HZ*. 220 (1975) 529-542.
- (120) Adkins, (1972) 59: アドキンスはギリシア諸都市は隣人からの攻撃に対して自ら防衛しなければならず、ペルシア戦争は新しいエネルギーを解放したけれども、基本的な状況はペルシア戦争前と全く同じであった、と考えている。
- (121) Cf. 高島純夫, 「古代ギリシアの外人観」『ギリシアとローマ——古典古代の比較史的考察——』弓削達・伊藤貞夫(編)(河出書房新社, 昭和63年) 314頁。

本稿は平成12・13年度科学研究費補助金基盤研究(B)の成果の一部でもある。